

パトリック・ホワイト三話

越 智 道 雄

パトリック・ホワイトが1990年9月30日早朝、シドニー南郊センテニアル公園の自宅で、宿痾だった呼吸器系統の病気で亡くなった。78歳だった。

「棺を置いて事定まる」というからには、私たちもいよいよ本格的なホワイト研究を発表しなければならなくなった。しかし彼が残した作品群は文学的暗号にも等しく、にわかな研究や論文をはねつける。そのせいかオーストラリア本国ですら、死に際してまだ本格的なホワイト追悼文さえ書かれていないようだ。私もここでは拙速を避けて、ホワイトという凝結核の周辺部をゆるやかに周遊するに止めておきたい。

1 非神格化の動き

ホワイトの文体は、神韻をおびている。そして本人が異常に近づきたい、またノーベル文学賞をとった。その他いろいろな理由で、彼はオーストラリア文学界では別格的存在とされてきた。

しかしシドニー大学のアンドリュー・リーマー教授によれば、「70年代後半から、オーストラリア文壇での彼の株はさがりはじめていた。彼は現代オーストラリアの声で語らなかつた。少なくとも文学の管理人（作家、評論家、文学研究）たちの耳には、非現代的な声に聞こえたのだ」。読者層は数のうえでへりはしなかったが、「若手作家、文壇の多くの層は彼に背を向けはじめた。彼の作品はますますエリート主義を代表するようになってきていた。ところが、エリート主義は、高踏文化に奉仕するものだったし、さらに悪いことには、現代オーストラリア文学思潮の悪魔主義（イギリスやヨーロッパに反旗を翻す傾向）から見て、決定的にヨーロッパ中心主義的傾向を代表するもので、オーストラリア作家たちは、これはなんとしてもふり棄てなければならぬと、ほぞを固めていた。だから今日どのオーストラリア文学学会を覗いても、ホワイトに関する発表はあまり多くはないのだ」。

リーマー教授は、「しばらくはホワイトの著作が書店の店頭からはもとより、学校や大学の必読書リストから姿を消すどころか、いくつかは絶版になるだろう」とすらいっている。気になる巨大な存在が消えてくれたとき、小人たちが必ず抱く安堵感が、現代のオーストラ

リア文壇に流れているさまが窺える。しかし「死後にしばらくたって、いよいよホワイトの重さがオーストラリア文壇や読者の骨身にこたえる時期が訪れる」とも、教授は予測している。

教授は1960年代半ば、ある学会の懇親会でホワイトとわずかな言葉を交わしたのが、作家との唯一の接触だった。話題はギリシャの島々、おとなになっておたふくかぜを患う危険、それに学会ゴシップという冴えないものだった。しかしホワイトの体からは、「電流」がほとばしっているようすが、ふたりの周辺にいた、彼をよく知っている者たちにまで分かるほどだったという。その電流は、「気後れと敵意」がないまぜになったものだった。ホワイトは自分を批判してきた学者たちを信用していなかったのである。またホワイトはインテリを嫌悪していた。1948年に帰国したのも、「この世で最も不毛な存在、ロンドン・インテリ」に墮すことを忌避したからだった。彼はいつている。「私にあるのは直観だけだ。私はインテリじゃないんでね。一度だってインテリだったことはない。だからあれだけ多くのインテリが、私の作品を嫌うんだ」。このインテリの代表は、シドニー大学でオーストラリア文学講座を主宰してきたレオーニ・クレマー教授である。またホワイトが自分がインテリではないといったのは、逆説のつもりではなかったのではないか。彼は農夫のようにみえたし、事実畑仕事が好きだった。最高傑作のひとつ『人間の木』は開拓者が主人公だが、この作品はホワイトがシドニー北郊のコースル・ヒルに小さな農場を営んでいるときに書かれた。

私は1979年はじめだったか、オペラ・ハウスへ知人のユダヤ系アメリカ人戯曲家（当時彼はユダヤ系オーストラリア人だった。現在は日本在住）となにかの芝居を見にいったとき、ホワイトが元首相ガフ・ホイットラムとロビーで立ち話をしている場面に出くわした。ホイットラムの巨体のうえには、血圧の高い肥満体の白人特有の不吉なまでに赤い顔が乗っかっており、体ごと崩れていきそうな不安定な立ち方をしていた。くたびれた、ラフな、パフ（淡黄色）のジャケットをはおるように着ている。ホワイトはかなり低く、私とそう変わらない背丈で、紺のシャツの肩が農夫のようにもりあがっていた。この農夫のイメージは、戯曲家バリー・オークリーも指摘している。「ときどきオックスフォード・ストリートやバデントンで買物する姿を見かけたが、ビーニー帽（正ちゃん帽）、セーター、ダンガリーのズボンという出で立ちは、ジャガイモ農場から出てきたばかりのように見えた」。目は写真でおなじみのように、猛禽類のようにきつく鋭い。無表情だが、その目のために、元首相の言葉に軽くうなづくようすが真摯にみえた。元首相のほうが、軽く興奮しているようだった。ホワイトとはわずか4歳違いなのに、元首相は10歳以上若くみえた。

私には「電流」は感じられなかった。私は有名作家の前で顔をあからめている人をときどき見かけるが、醜態だと思っている。作家と出会うときは、友人としてか、さしで対決するときか、ふたつにひとつだと思ふ。同行の知人は私より8歳若かったし、ブラック・ユーモアを駆使する典型的な60年代作家だったから、リーマー教授の先の言葉通り、動物園の奇

妙な猛禽類を見る程度の好奇心しか示さず、ふんという感じでその場を離れ、客席へは行っていった。私たちが後部座席に座ると、ホワイトが真ん中の座席へ体をななめにしては行っていくのが見えた。知人は達者な日本語で、前部と後部座席の狭い隙間を老人くさい動作ですりぬけていくホワイトの動作に合わせて、「よーいしょ、よーいしょ」とつぶやき、相手がやっと座り込んだとき、「ああ、どっこいしょっと」といって、私ににやりと笑いかけた。まさに「ホワイトに背を向ける若手作家」の面目躍如たるものがあったわけだ。

2 最期の模様

亡くなったのは、9月30日の朝五時半、シドニー南郊外センチナル・パーク、マーティン・ロードの自宅であった。死因となった呼吸器系統の病気は、彼の宿痾だった。助膜炎、気管支炎、それにわずかに四歳から患ってきた喘息の複合症である。さらに関節炎、きつい背中での痛み、そして縁内障もとりについてた。この二年ほどは看護婦が朝9時から午後5時まで、この自宅で見守りをしていた。死の数週間前は特にひどく、看護婦は24時間体制で看病していた。

マーティン・ロードの家は、擁壁のうえへさらに土盛りした地面に建っており、まわりは立木で囲まれている。私が最後に見た1989年冬時点には、フレンチ窓の外に木の枝から平らな竹籠がぶらさがっていた。小鳥の餌でものせていたのだろうか。

この街路の家は、ホワイト宅より大きなものが多い。ゲイ・カップルのギリシャ詩人、マノリ・ラスカリスとふたりでくらししてきたから、この程度の家でじゅうぶんだったのだ。また街路としてはやや卑俗で、ホワイトの神韻ひょうびょうたる文体にはそぐわない。『生体解剖人』の画家主人公ハートル・ダフィールドは、もっと都心でくらししたので、これ以上に卑俗な住まいだった。ホワイトは生活については、噂されるほど貴族趣味ではないように思う。

1965年にここへ越してくる前は、北郊のコースル・ヒルで小さな農場を営んでいた。前章でふれたように、ホワイトの風采は貴族的ではなく、農夫のようだった。彼自身、ちょっとした土いじりが好きで、農場生活の体験が『人間の木』の元になっている。ただしここもシドニーの郊外だった。彼の作った架空の郊外として有名なサーサパリラは、コースル・ヒルがモデルになっている。

さてホワイト自身は、少なくとも7日は自分の死を伏せておくように、マノリ・ラスカリスに頼んでおいたらしい。たぶん長年いっしょにくらした彼への配慮だったのだろう。しかし死の報せは、早くも同じ日の午後10時にはABC放送が報じた。『デイリー・テレグラフ』などは、怖いホワイトが死んでマノリだけになればもうこっちのものだと思ったのか、大胆にもマーティン・ロードの自宅におしかけてきた。マノリ自身は10月1日、「パトリック

クは長い病気の末、日曜日の朝早く静かに息をひきとった。肝心なのはそれだけです。後に残ったわれわれのことは、どうでもいいことだ」とだけ答えている。

遺体は、本人の遺言で火葬、遺骨はセンチナル・パークにまくことになった。日本では法律でこれができないが、最近ではライシャワーの例もあるように、知識人の遺志としてはふえる傾向にある。死後も裏庭に留まるとされたのは日本人の霊だったが、ホワイトはマノリのためにも自宅近くに留まりたかったのかもしれない。

デーヴィッド・マーはホワイトの伝記を執筆中だったが、作家の体力が衰えていたおかげで、厳しい注文を免れたという。われわれにもさいわいだった。ホワイトが元気なうちだったら、サリンジャーと彼の伝記作者との対立以上の紛争になっていたかもしれない。

マーによれば、ホワイトは「最後の週まで、いつものとおり好奇心旺盛で、冗談をとばし、あれこれ注文が多く、気にいらぬことには例の人を切り裂くような激しい悪意を剥き出しにした」。『人間の木』のテレビ・ドラマ化を担当している、ホワイト気にいりの監督ニール・アームフィールドによれば、「2、3か月前に会ったときは、来年の上演をめざして、イプセンの『大建築家』を英訳しようとまでしていた」という。

3 ホモについて

ホワイトはホモ体験をふたつに使い分けていたようだ。(1) 1つはマノリとの生活、(2) もう1つはホモ体験による歪みを創作の視点形成に利用することだった。

(1) の場合、ホワイトはマノリを「私の人生の中心的曼陀羅」と呼んでいる。私は『かわいそうな私の国』の著者ザヴィア・ハーバートと会ったとき、私のモートルへ来る前に夫人のサイディと同乗していて、若者の乱暴な運転で「危うく衝突するところだった」と憤慨し、「サイディは私のセンター・オヴ・グラヴィティ〔重心〕なんだ」と、夫人を失うことを恐れる気持ちを口にしたのを思い出した。マノリは、ハーバートにとってのサイディ夫人に相当する存在だったのだろう。自伝『ひび割れた鏡』では、マノリはほとんど読者にイメージが浮かぶようには描かれていない。第2章でふれたよこに、ホワイトはマノリをひとり静かに悲しみに耽らせるために、自分の死を少なくとも1週間伏せておくように配慮していた。

ホワイトは人を憎む心が異常に強かった。異常に高い自尊心とホモのせいだったと見られている。もっとも両者は鶏と卵の関係だったろう。いずれにしても、そんな彼だから、いくら長年いっしょにくらしてきたとはいえ、マノリの欠点を許せず、自伝で例のメスで切り裂く筆致で切り刻むことがあってもよかった。しかしそれはなかったのだ。ホモ同士はうまがあうと、はるかにヘテロのカップルより琴瑟相和すといわれている。彼らの場合もそれだったのだろう。まさかホワイトにかぎって、マノリの欠点に辟易してたくせに、老境には

いった寂しさから彼に捨てられるのを恐れて、自伝での切り刻みを手控えたのではないだろう。

(2) の場合は、やはり自伝が手掛かりになる。ホワイトは書いている。「(ホモとして社会の異端となる) 恐怖を消してしまえば、ホモの性質から得られる認識力のおかげで、男、女、芸術家、その三者のどれか、あるいはそれらをひとつにあわせた者としての自分に自信が持てた」。

この恐怖を消すというのが大変なはずだ。なにしろたいいのホモは、生涯をその恐怖に圧倒されて送る。1970年代にはいって、主にアメリカでゲイ解放運動が起こったが、その最初の目標は「恐怖」の克服だった(詳しくは拙著『アメリカ「60年代」への旅』朝日選書参照)。ホモは「クロゼティッド(隠密)」と「オープン」に分かれる。隠密からオープンに変わることを、カム・アウト(オヴ・ザ・クロゼット)という。ホワイトのような巨人ですら、自発的にカム・アウトしたのは、自伝を刊行した81年で、69歳という遅さである。ふつうの人間がカム・アウトするのにどれだけの勇気がいるか、想像を絶するではないか。その意味で「ゲイ解放運動」は極めて感動的な活動だといえよう。

ただホワイトほどの巨人が、ふつうの人間のようにカム・アウトを恐れていたとは思えない。彼がホモであることは、自伝刊行よりずっと前から周知の事実だった。クィンズランド大学日本・中国研究科の主任教授アラン・リックスさんの母堂は、1976年私にホワイトに対する抜きがたい嫌悪感を口にした。グレアム・キンロス・スミスの『オーストラリアの作家たち』(ネルスン)には、演説するホワイトを顔をしかめて見上げるリックス夫人が写っている。「冷たくて固い。特に女性に対してそうだ」と彼女はいった。夫人は美貌だが、大柄で、あねご肌の男性的な性格なので、ホモから毛嫌いされるタイプとも思えないのだが、とにかくそういうことだった。

だから私はこう考えている。ホワイトは少なくとも初期の小説群を書きころから、「恐怖」を変質させるこつを体得し、「ホモの性質から得られる認識力」を活用する術を身につけていたのではないか。まず彼は「恐怖」を「憎悪」に変質させた。(2) でふれたように、ホワイトは気に入らない人間はもとより、気に入っていた人間が気に入らないことをやると、激しく憎む。後者の典型は、この国を代表する画家シドニー・ノーランとの経緯である。ふたりは親友だった。ところがノーランが妻の死後すぐほかの女性と再婚したとき、ホワイトは激怒した。ホワイトはノーランより、むしろ亡くなった夫人と親しかった。彼女とリックス夫人のどこが違ったのか、私には分からない。ともかく故ノーラン夫人がホモの男性に違和感を覚えないタイプの女性だったのは、間違いない。ホワイトの痛烈な中傷に頭に来たノーランは、かわいさ余ってなんとやら、ホワイトとマノリの絵を描き、それに直腸まで描き入れた。ホモ関係を露骨に示したのだ。さらにノーランは『ヴォス』の映画化権を手に入れていたので、自作の映画化には極めて神経質なホワイトの神経を逆撫ですべく、制作計画

をぶちあげては、いびり続けた。ノーランの逆上ぶりから、逆にホワイトの憎悪の激しさが窺える。

この「憎悪」は「ホモ的性質から得られる認識力」と連動している。ホワイトはなにを認識したのか？ 彼は知っている。「剃刀のような真実を追い詰めていくために、私は人切りになりはてた」。認識したのは、「剃刀のような真実」だった。ノーランを切った「憎悪」は、ノーランが故夫人との「剃刀のような真実」をないがしろにしたことへの怒りだった。「ホモ的性質から得られる認識力」が「剃刀のような真実」を認識できるのは、「男、女、芸術家をひとつに合わせた者としての自分に自信が持てた」からである。

古来ギリシャ人は両性具有者をハーマフロダイトと呼んで、完璧な人間と考えていた。つまり理想の男性ヘルメスと、理想の女性アフロディーテが合体した存在なのだ。「男、女、芸術家をひとつに合わせた者」は、ハーマフロダイトよりさらに完璧な人間ではないか。ここでホワイトは、ホモの歪みを創作の視点形成に利用しきっていることが分かる。

ホワイトの言葉や文体は、「剃刀のような真実を追い詰めていくために」動員された。だが主人公その他の登場人物も、それを追い詰めていく。特にそれが強烈に描かれているのが、『ヴォス』と『生体解剖人』の主人公、そして『完璧な曼陀羅』の双子の主人公のひとり、ウォルドーである。彼らが「剃刀のような真実を追い詰めていく」過程は、主に他者を傷つける過程だった。ホワイト自身、その過程で「人切りになりはてた」と告白しているではないか。逆に「剃刀のような真実」に目をつむれば、他者を傷つけずにすむ。ヴォスが自分と同質の女性ローラ・トレヴェリアンと初めて出会ったとき、まるで日本の武芸者同士が対決したときのように激しい火花がちる。彼が奥地への探検に出ず、シドニーに留まっていれば、ふたりは精神的にたがいを食い殺しあっただろう。ちょうどホワイトとノーランがたがいに魅かれながら、殺しあったように。ヴォスは探検隊のメンバーとも、精神的に「切り合い」をくりひろげる。そして彼は究極的には、オーストラリア奥地そのものと切り結んで果てるのだ。そのために、ローラとの殺しあいは回避され、彼女は逆にヴォスをオーストラリア建国の歴史のなかに位置づける役目になうのである。

『生体解剖人』の主人公画家ハートル・ダルフィールドは、シドニーを中心とするオーストラリア社会から「剃刀のような真実」を抽出・描出しようとして、多くの他者を傷つけ、その一部を死にすら追いやる。彼に惚れた娼婦ナンス・ライトフットは、彼が彼女との関係を自国社会の「生体解剖」に利用することにしか関心がないと知って、自殺する。この冷酷さと同質のものを、リックス教授の母堂がホワイトに感じて激しい嫌悪にかられたのだ。ダフィールドは、屑屋と洗濯女を両親とする家に生まれたが、卓抜した画才ゆえに富豪コートニー家に500ポンドで買いとられた。この逸話には、芸術家と自国社会との宿命的関係が象徴的に表されている。社会は自分を「生体解剖」する芸術家を弾圧すると同時に、その作品を自らの存在証明の1つとして買い上げるのである。ダフィールドは、コートニー家に買い

とられた瞬間から、ひたすら「剃刀のような真実を追い詰め」ようと、社会そのものに切りつけていく宿命を負わされたのだ。ホワイト自身は富裕な大牧場主階級の子供として生まれたが、ホモの宿命を背負っていた点が、ダフィールドのコートニー家に買いとられた運命と呼応しているわけだ。

『完璧な曼陀羅』のウォルドーにとっては、ヴォスにとってのローラや探検隊員、ひいてはオーストラリア奥地、またダフィールドにとってのナンスやコートニー家、ひいてはシドニー社会に相当するのは、精神薄弱児である双子のアーサー1人である。

3人の主人公では、ヴォスとウォルドーが死んで、ローラと、探検隊員で元流刑囚のジャッド、そしてアーサーは生き残る。ダフィールドも最後は死ぬが、ヴォスやウォルドーと違って、芸術家対社会の対決では一応の勝利をおさめる。これは探検という実績を残すにはローラやジャッドの証言を必要とするヴォス、探検という大事業とは無縁にエキセントリックとしての生涯しか送れなかったウォルドーに比べて、作品が残せる芸術家の強みだろう。この点、ダフィールドはホワイト自身と至近距離にいるわけである。リーマー教授もいっているように、ホワイトの死によって近い将来彼のより深遠な解釈と評価が始まり、それによってホワイトは死後なおも自国社会を支配し続けるのだ。

最後に『トワイボーン・アフエア』にふれておきたい。この長編の主人公は、女性、男性、女性と3つの性的アイデンティティを遍歴する。最初は南仏に住むビザンティン帝国皇帝僭称者の老ギリシャ人の情婦、次がオーストラリアの牧童、最後にロンドンの高級娼婦宿の女主人である。ホワイトは自伝『ひび割れた鏡』を発表する前年にこの小説をだしたから、先に引用したホモとしての恐怖云々の言葉は、一層真実味をおびている。ホワイトは、『トワイボーン・アフエア』ではホモ的認識力を隠喩的に創作に活用することから脱皮、ホモそのものを事実上初めて創作の主題にとりあげた。『古代戦車を駆る人々』では、4人の主人公の1人、混血アボリジナル画家の周辺にホモが出没したことはあるが、本格的な取組は今度が初めてだった。

この作品では、作者はいわば創作上の隠微な装置を表にだし、それ自体を主題にしたことになる。ただ主人公トワイボーンを芸術家、つまり「男、女、芸術家をひとつに合わせた者」にしたてるだけの余力はなかった。そうなってれば、トワイボーンはダフィールドを凌ぐ複雑な人物になれたのだが、

元来、芸術家を主人公にした小説は、作者はあまりに近い存在を描くので、非常に書きにくいのだ。『生体解剖人』は、切り裂かれるオーストラリア社会のほうがダフィールドより弱くて物足りない点を除けば、芸術家小説の白眉の1つにはいるだろう。オーストラリア社会がヨーロッパ社会のように歴史の分厚い累層に覆われていれば、もっと重層性のある作品になっていたことだろう。その意味でオーストラリアだけを舞台にして、ホモの芸術家を主人公とする小説を書くことは、さすがのホワイトにも至難を通り越して、不可能だった。い

や単なるホモを主人公にする小説すら、オーストラリアだけではむりだったのだ。

トワイブーンとは、「二度生まれる」という意味である。いうまでもなく「男」と「女」を合わせた存在を意味している。主人公は、オーストラリア以外では男性としての自分を否定して生きている。自国オーストラリアでは正体が知れているので、男性にもどろうとするが、牧場支配人に犯されて、ロンドンへ去り、高級娼婦宿の女主人として暮らし、はるばるロンドンにきた実母と出会って、いま一度男性に戻って彼女のもとへ急ぐ途中、ナチス空軍の爆撃で死ぬのだ。トワイブーンが女性として生きることが、「虚」に生きることである。男性として生きられないことは、「実」に生きられないことだ。芸術家は自国社会という「実」のなかだけで生きることができない。作品という「虚」と社会という「実」のあいだを往復して生きる。この点ホモと酷似している。しかしダフィールドは作品を残せたのに、トワイブーンは作品という「虚」にして「第二の実」を残せない。これはエキセントリックのウォルドーがなにも残せないことと似ている。ヴォスは辛うじて、ローラたちの証言によって歴史に自分の足跡を残してもらえた。

この意味で、私には、ホワイトにホモ芸術家を主人公にした小説を書く時間が残されていなかったことを、残念に思うのだ。しかしあの高齢では、たとえ病に冒されていなかったとしても、その希望はかなえられなかったことだろう。

Three Pieces about Patrick White

Michio Ochi

1. A MOVE TO PULL WHITE OUT OF THE APOTHEOSIS

The 1960 counterculture exposed the self-contradiction in Patrick White; though he had been along with the counterculture taking a liberal stance toward a number of social as well as cultural problems, he stuck to almost aristocratic attitude in writing entirely opposite to the popularism of 1960s.

The exposure seems to have been considerably responsible for the tendency among young writers and literary people to turn away from the god-like influence White has long been wielding upon Australian literary scene.

The tendency might be seen as another example of the struggle between the communalism and solipsism in the literature of this country; the former has been represented by Henry Lawson depicting his characters strictly in context of their community while the latter is said to have first taken root in the poems of Christopher Brennan who sought to cut into the mysterious depth of human psyche far away from the noisy pioneering situation of his country. The 1960s literary movement may safely be compared to the communal tendency Lawson represented and that is why those who join it are turning their back to White who is exactly the successor to Brennan's line.

2. HOW WHITE SPENT THE WEEKS AND DAYS BEFORE HIS DECEASE

Several glimpses at how White faced his last days collected from Australian newspapers and periodicals.

3. HOW WHITE MADE ARTISTIC USE OF HIS HOMOSEXUAL EXPERIENCES

In his autobiography White confesses that the nullification of his fear of being an outsider against the social and moral code as a homosexual person liberated in him a very special and unique cognitive as well as intuitive power that had been raised through the experiences he had to accumulate deep inside

because of his almost impossible existence with three identities; man, woman and artist, mixed altogether within himself.

The confession is so helpful to me in looking not only into THE VIVISECTOR in which White gives his first full presentation of an artist hero but also into THE TWYBORN AFFAIR in which he first depicts the hero as a homosexual person. The crisscrossing of the artist-hero and the homosexual hero in these works should be examined more extensively in terms of the autobiographical confession.